

私は一年の半分以上をきもので過ごしている。裾切れはしょっちゅうである。下着から、襦袢、着物・・・、段階を経て一枚の布が曲線を持った立体の身体にまとい、重なっていく間、少しずつ姿だけではない自分の変化を感じる。最後、帯を身体に巻きを終えたとき、もう一人の自分が出来るようになるように思える。帯締めはそのまとめ役だ。

身体からはずしていくときも同じである。その日を終えた自分という生身の身体と向き合うささやかな時間。これを何度繰り返してきたのだろう。

きものを着始めたのは20代の頃。最初自分ではどうにも着ることができなかった。本を畳の上に広げ一人悪戦苦闘。それを見かねた母はよく手を貸してくれた。「裾は床ぎりぎりに揃えて腰ひもを結ぶの。結んだら中に手を入れて前後ろを整えて・・・。帯枕の紐は前に突き出して枕が背中であちちに着くように。最後は必ず背を御太鼓の下から引いておくんだよ、きれいに見えるから・・・」。

私は今でも着物を着るたびに、そしてその動作ごとに母の言葉が頭に浮かび、母の声が私の中に今なお生きていることを感じる。

先日、20年以上使っていた白無地の腰紐すべてが痛みが激しくなっていることに気付いた。擦り切れてしまう前に紐のままで残しておきたい！という思いに駆られて、慌てて新しいものを買って求めた。じつはその腰ひもは私が嫁いだ時、母が持たせてくれたものだった。腰紐の先端部分には母の字で「陽子」書かれていた。娘を思う母の気持ちが今頃になってしみじみわかる。今にも引きちぎれそうだったその腰紐は母との思い出の一つとして今は大切に紙に包んでしまっている。

きものは、時を越えて祖母から母へ母から子へ(たとえ母子でなくとも)次世代に渡すことができる。若い人から年配の人まで形は変わらないし、年代を問わずデザインも同じである。コーディネート次第で素敵に装えるおしゃれの楽しさもある私たちの民族衣装である。

着込む程に身体になじみ、しまうとなったら一枚一枚フラットになり同じ形に収納されていく不思議さ。箆笥の中の整然と収納できる構造には他国の人からみたら驚きだろう。

気持ちがささくれだっている時でさえ、脱いだきものを縫い目に添って畳むうちなぜか落ち着き、静まり返る心。

着物を着て動くことは決して楽ではないし、不自由かもしれない。だがその不自由さゆえに生まれる「しぐさ」「たたずまい」は、なんと人を美

しく見せることだろう。

そこには決してなくしてはならない尊い日本文化が宿っているように思えてならない。

かつて聞いた曲げわっぱ職人の話が思い浮かぶ。

「今や花見で持っていく重箱も弁当もプラスチック。多くのものが使い捨ての時代になってしまった…。田中さん、あなた子や孫に暮らしの足跡を残すもの、何か持っていますか？」と。

私は家庭のことも十分できない、必死で仕事をしながらのこれまでの人生だった。私が娘2人に残せる暮らしの足跡は、これまで身に着けてきたこの「着物」なのかもしれない。

着付けの仕方を教えたこともないのに娘がきれいにゆかたを着、帯を結んだ姿を見たある日、どこかでそう思えた。

本当に私たちはかつての女性たちからなんと素晴らしいものを受け継いだのだろうと思う。きものを着た者同士で向き合い、きものを挟んで交わすお互いの気持ちや言葉。着せてあげたり着せてもらったりするその会話も大切にしたい文化のひとつ。

そして何より自分が着て見せることだと思う。それはきものを着ない人にも日本を感じさせることができることだから。

文：田中陽子